年報　タイ研究　No.11，2011　47－64.

【論 文】3

カンボジアのラオ村落における競合と社会形成
―― 僧侶の飢えの事例から ――

Competition and Society Formation Process in Lao village of Cambodia: A Case Study of Food Shortage for Monks

山　崎　寿美子*
YAMAZAKI Sumiko

This paper examines Lao village formation process in Stung Traeng, Cambodia, presenting a case that monks could not receive enough food despite daily rotational serving by villagers. Beside cooperation on the serving, competition among households can be seen in form of gossips, which still makes monks out of food.

In the village competition appears not directly but as gossips which are inherently fluid and always changing in target and contents of calumny. I describe some cases of such competition among villagers in relation to disengagement with serving for monks. Finally, instead of concluding that the competition tends to collapse the society, I suggest the Lao village society is being formed with the specific ways of competition.

1．はじめに

本稿の目的は、カンボジアのラオ村落における僧侶の飢え（*ut khao*）を事例に、背後にある世帯間の競合を検討し、ラオ村落社会の形成過程を描き出すことである。上座仏教の僧侶の飢えを俗的な競合と結びつけるのは些か強引かもしれない。しかし、両者は密接に関連している。本稿では、競合を否定的に捉えず、むしろ、その特徴的な在り方に積極的に着目することにより、ラオ村落社会の理解を試みる。本章では、まず、ラオ村落社会に関する主要な先行研究を概観し、その問題点を整理するとともに本稿の視座を提示したい。

（1）ラオ村落社会の研究

本稿の対象は、16世紀～20世紀前半頃、ラオス南部のチャンパサック県周辺からカンボジアへ移住してきたラオ人の子孫や親族である。ラオスのラオ人集団に関する先行研究では、村落が唯一の社会的政治的単位でありながら村落内にも政治的統合の中心がないという状況が指摘されてきた。そこにおいて人々はどのようにまとまり、村落社会を形成しているのかという問いが、先行研究に共通する問題であった。

タイヤールは、社会主義革命（1975年）以前のラオスのラオ村落の特徴として、人々の居住単位、利害の共有、諸々の社会関係の中心といった３点を挙げ、そこに連帯の論理が通底しているとした。

*筑波大学大学院人文社会科学研究科博士課程

彼の主張には、村人同士の相互扶助が村全体の共通利益のためになされるという想定があり、農作業の労働交換等の世帯間協働も、村落の連帯に結びつけられていた［Taillard 1977］。こうした想定はその後の研究者達にも共有された。エヴァンスやイアーソンは、社会階層がありながらも搾取的な階級関係を生み出さないというメカニズムを追究し、ラオ村落内の協働や相互扶助を連帯として捉えることで理解しようとした。［Evans 1995, Ireson 1996］。

イアーソンの研究は、ラオスの複数村落において、協働が長期的な期待を通した緩やかな互酬性のもとに成立することを指摘した点で評価できる。彼は、世帯と村落の各レベルで協働の形態を分類し、参加者、招待や饗応の方法、不参加の理由や制裁等、細部に亘って諸規則を整理し、協働の社会的重要性を示した［Ireson 1996：233–235］。しかし、あらゆる行為を連帯の原理に収束させてしまった点は大きな問題であった。例えば、陰口は、一定の抑止力として働く制裁であり、村全体の連帯につながると解されている。彼の研究は、機能主義的見地から自然経済における村落の役割を探求し、連帯が議論の前提であり到達点でもあるという同語反復に陥っていた。

こうしたパラダイムを転換させたのが、チャンパサック県のラオ村落での現地調査を通して、連帯を所与とする既存研究に疑問を付したハイである。彼女によれば、従来の研究は連帯を自明の理とし、自然経済の生存戦略として協働を捉えてきたが、実際の人々の協働は、相互扶助の美徳や負い目という価値観に後押しされ、特定相手との個別的な関係に基づいて成立すると主張する。そして、農作業の労働交換、世帯の儀礼の招待や参加、村全体の行事等を例に、社会が常に負債関係を残しながら個人的紐帯によって形成されていくと述べている［High 2006 a］。

ハイの貢献は、既存研究で所与とされた連帯の中身を暴き、どのように社会が形成されていくかというプロセスを重視し、常に負債を残しながら世帯間関係が編まれること、そして世帯間関係というレベルから村落社会が創られる過程を示した点にある[1)]。

(2) 問題の所在

ラオ村落社会に関する一連の議論から明らかなのは、政治的中心の不在状況で人々がどのようにまとまり村落社会を形成するのかという問いに対し、一方は連帯という固定的価値観に帰結し、他方は個別的な関係に基づく可変的かつ構成的な捉え方で対応してきたという点である。本稿は、基本的には、プロセスとしての村落形成という後者の立場を踏襲しながら、さらに、従来の研究とは角度を変えた検討を試みる。

先行研究では、協働の議論に執着するあまり、村落社会にある競合には注目が集まらなかった。競合は、連帯の失敗または連帯の潜在的な脆さとして否定的意味合いで捉えられるにすぎなかった［e.g. Ireson 1996：235］。ハイも、既存研究の前提の論駁に尽力し、競合には着眼していない。それに対し本稿では、僧侶の飢えの背後にある村人同士の競合に光を当て、ラオ村落社会の形成論理の理解を試みる。プロセスとしての村落形成という視点に沿いつつ別の角度から光を当てることで、競合は、連帯の失敗例でなく、世帯間関係のレベルから村落が形成されていく一側面として捉えられる。

筆者の調査地において競合は、直接対立に至らずに間接的に生じる場合が多い。中田は、連帯の概念が浸透するラオス南部の少数民族社会で、人々が威信や名誉をめぐって競合する様相を論じている。そこでは、家屋建築を例に、競合が家屋として顕在化することが示されている［中田 2004］。これに対し筆者の調査地では、競合が見えにくく、文脈によって批判の対象や内容が変化する流動的な陰口等に表出しやすい。本稿では、僧侶の飢えの背後にある陰口という形での世帯間の競合に着目し[2]、その特徴的な在り方を検討することによって、ラオ村落形成の様相を提示する[3]。

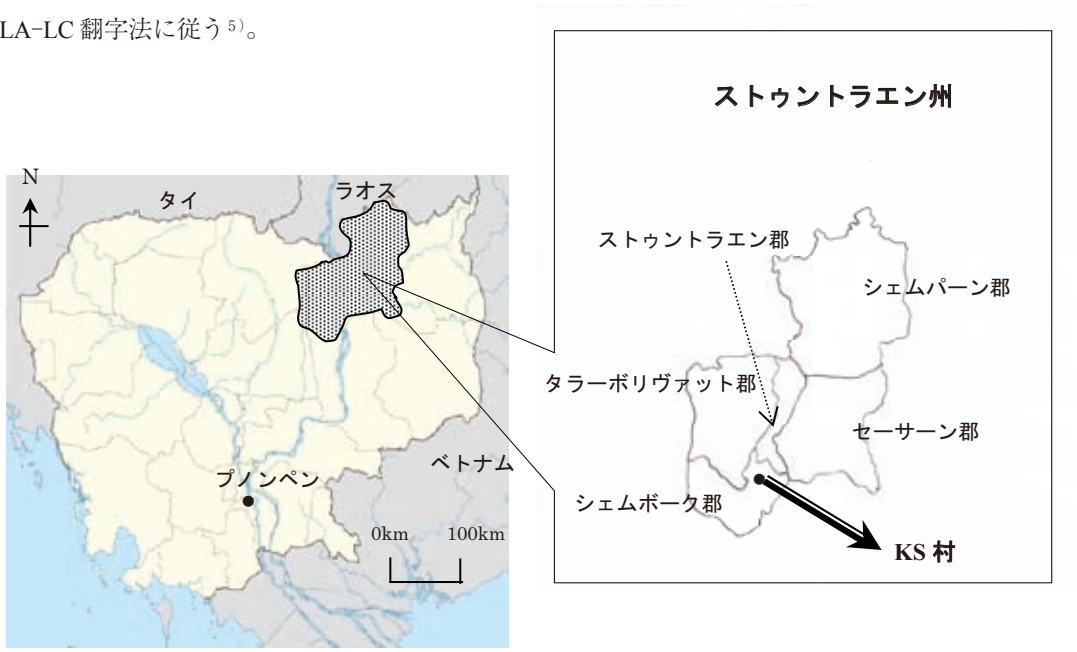
なお、本稿のデータは、18ヶ月（2007年7月～2008年12月）に亘る筆者の現地滞在調査に基づく[4]。使用言語は現地のラオ語とクメール語を文脈に応じて併用し、ローマ字表記は原則としてALA-LC翻字法に従う[5]。

2．僧侶の飢えの状況

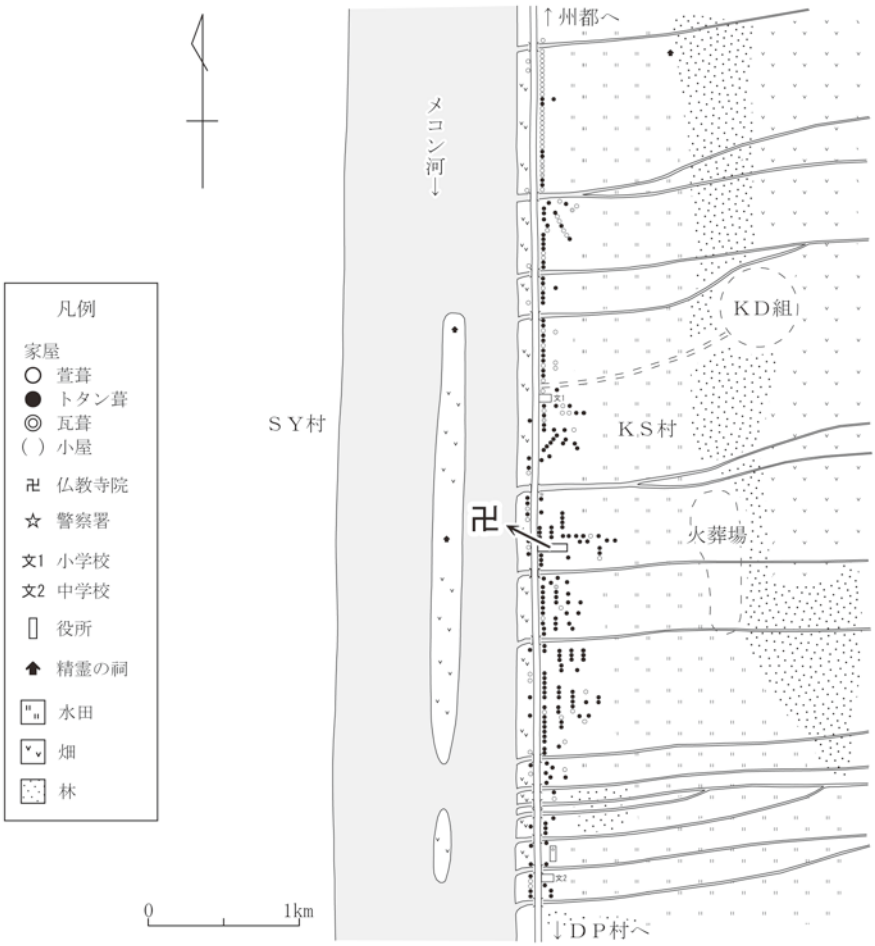
(1) 調査地概要

筆者の調査地は、カンボジア北東部、ストゥントラエン州シェムボーク（*siam pūk*）郡KS区に位置するKS村である（地図-1）。同州の北方はラオスと国境を接し、南北にメコン川が貫く。KS村は、メコン川沿いに南北に細長く形成されている（地図-2）。人口は、2008年当時約1470人、266世帯［Montii phaenkaa khaet stung traeng 2008：2］であり、このうち233のラオ人世帯は日常的にラオ語で会話をしている[6]。

本節では、僧侶の飢えの状況を説明する前に、KS村の僧侶を紹介し、彼らの食事や食施の方法を概観する。



地図-1　調査地KS村の位置
出所：［CEPA 2006：20］に基づき筆者改編



地図−2　KS村の地図

出所：筆者作成

1）KS村の僧侶

村人は上座仏教を信仰し、村の中心部に寺院を建てており（前掲地図）、「自分達の寺院（*vat hao*）」として他村の寺院から区別する[7]。そこに僧侶が止住し、食施や仏教儀礼等の際に村人が訪れ、宗教的活動の中心となっている。また、寺院は、村の集会所、抜け道や家畜の放牧等にも利用され、村人の日常生活空間の一部でもある。

当時、止住する僧侶は7人であった[8]。僧侶は、教義上は世俗を離脱し、生産活動に従事せず、戒律を順守して生活を送る。村人との身分の異同は、僧侶への特別な呼称にも表れている。KS村では僧侶への呼称として、「クバー（*khūbā*：比丘）」と「ネーン（*nēn*：沙彌）」という教義に基づく区別と、年齢、出家歴、誦経や護符作成の能力等に基づく「クバー・ニャイ（*khūbā nyai*：大きな僧侶）」と「クバー・ノーイ（*khūbā nǭy*：小さな僧侶）」という2種類の区別がみられる。村人は、僧侶との対面状況や儀礼においては前者の区別に従い、村人同士の日常会話においては後

者を用いて僧侶に言及することが多い。当時、クバー・ニャイは77歳の住職１人で、20～25歳の若年僧侶６人は全てクバー・ノーイと呼ばれていた（表－１）。以下では、クバー・ニャイを住職、クバー・ノーイを若年僧侶と表記する。

住職と若年僧侶の区別は、食事状況の違いと重なり、当時、飢えは若年僧侶のみに生じていた。この差異は僧侶にまつわる村人間の競合と関連している。以下では、競合の具体的記述の前に、僧侶の食事や食施の方法について、一般的傾向とKS村の特徴とを確認しておく。

２）僧侶の食事と食施の方法

カンボジアにおける僧侶の食事や食施は、地域や文脈により多少違いはあるが、一般的に次の傾向がみられる。まず、食事の際、僧侶が一定時間に講堂（*sālā chan*）等に集合し、円陣を組み一斉に食事を囲む。この際、比丘と沙彌、または年配僧侶と若年僧侶が陣を分けることはあるが、時間と場所は同一である。そこに村人が食事を寄進し、全ての料理が食器に移され僧侶によって共食される。

食施方法は、托鉢、寺院での共同調理、世帯ごとの調理に大別できる。托鉢では、僧侶が鉢を抱えて世帯をまわり布施を請う。共同調理は、寺院に住む女性修行者を中心に行う場合と[9]、世帯が輪番で行う場合がある[10]。世帯ごとの調理は、有志、特定世帯による特定僧侶の担当制や、世帯単位の輪番がある。

以上に対し、KS村では、まず、食事方法は非同時的で個別的である。1990年代以降、僧侶数の減少と住職の高齢化も相まって、儀礼以外の一斉の食事が少なくなってきた。現住職は体調不良のため自らの庫裏で食施を受け、若年僧侶も講堂か庫裏で個別に食事をとることが多かった。

また、食施については、托鉢は稀で[11]、世帯ごとの調理が主である。僧侶への食施は「ヘット・パーカオ（*het phā khao*：［食事の］盆を作る）」、「リアン・クバー（*liang khūbā*：僧侶を養う）」等と呼ばれ、各世帯が自家で調理し、重箱式の弁当箱（*pintō*）に米飯と料理を入れて寺院に持っていく。2006年からは輪番制（*vēn phā khao*：盆の当番）

表－１　KS寺の僧侶（2007年７月～2008年12月）

村人による区分	整理番号	身分	安居年数	年齢	出身地	受戒寺院
クバー・ニャイ	1	比丘　＊住職	29	77	州都	U寺（首都）
クバー・ノーイ	2	比丘	5	23	州都	KS寺
	3	比丘	5	22	KS村	KS寺
	4	比丘　→還俗	3	25	KS村	沙彌：KS寺、比丘：S寺
	5	沙彌	2	20	PC村	KS寺
	6	沙彌　→還俗	2	20	PA村	KS寺
	7	沙彌	1	20	KS村	KS寺

注）→：筆者の調査期間中になされた身分異動を表す

出所：調査にもとづき筆者作成

が敷かれ、当番世帯が担当僧侶に朝昼の食事を寄進するようになった。

輪番制の施行には次の経緯があった。1950年代にKS村での出家経験をもつ男性（67歳）の語りによれば、かつては、各僧侶に「カム（*kham*：支援者）」が1世帯おり、還俗または他界するまで食施を担当したという。カムは、村人口が少数の当時、先住者により担われていたが、人口増加に伴い、一部の村人に積徳行の機会が集中する状況に文句が呈され始めた。そこでカムは中止され、積徳行の機会を公平にするべく、輪番制が採用された。寺院での共同調理の案もあったが、女性修行者がいないため実現困難とされ、世帯単位の食施が続けられている。

３）食施の意味と輪番の仕組み

KS村において食施は多元的な意味を包含する。それはまず、生産活動を禁じられる僧侶にとっては食生活の基盤であり、村人にとっては「アオ・ブン（*ao bun*：功徳を取る）」と呼ばれる積徳行である。食事は、寄進と僧侶の儀礼的行為を通して、功徳とともに村人の祖先（*phī nǭng tāy*：亡き親族）へと転送され[12]、祖先と子孫の間で共有される。さらに、年中行事化した儀礼や世帯単位の通過儀礼、祓災儀礼の実施に僧侶は不可欠であり、日々の食施を通して僧侶を養うことは重要である。実際、自村の僧侶（*khūbā bān hao*）が不在の状況を村人は恐れる[13]。このように、食施は、村人の積徳行であると同時に、僧侶の継続的な止住と誦経の享受を確約してもいる。

また、輪番制の施行により、食施は、僧侶の生活基盤を支えるために村人が助け合う（*sǭy kan*）という、村全体の協働の様相も呈している。ところが、次に示す輪番制の特異な仕組みは、むしろ村人同士の不平等を助長し、陰口を通した競合を引き起こしていた。本来中立的な僧侶も間接的にまきこみ、若年僧侶の飢えという形で影響を及ぼしながら、競合が進行していた。

輪番制は、地理的基準に基づき、世帯を7つの組（*krom*）に分けて実施された。各組は平均38世帯から成り、毎日朝昼の2回、各組から2世帯ずつ当番に当たるため、1世帯の当番頻度は約半月に1度である。また、食施相手に関しては、第4組のみが住職を担当し、他の6組は若年僧侶の担当であった（表−２）[14]。A組が住職担当になった表向きの理由は、高齢の住職の体調管理に常に気を配れるように、寺院に近い世帯が適当というものであった。組の区分も、寺院を中心として、村の南端から寺院までが第1組〜第3組で「フアン・タイ（*hūan tay*：南の家）」、寺院周辺の第4組は「フアン・テーオ・ワット（*hūan thǣv vat*：寺院周辺の家）」、さらに寺院から村の北端までは第5組〜第7組で「フアン・ヌア（*hūan nưa*：北の家）」と呼ばれていた。

表−２　各組の世帯数および担当僧侶

組番号	世帯数	担当僧侶
1	44	若年僧侶（3）
2	35	若年僧侶（2）
3	29	若年僧侶（4）
4	38	住職（1）
5	33	若年僧侶（5）
6	43	若年僧侶（6）
7	44	若年僧侶（7）

注）（　）内の数字は表−１の整理番号に対応する
出所：調査に基づき筆者作成

本稿では、食施相手を基準に、住職担当の第４組をA組、若年僧侶担当の６組をB組、あるいは文脈に応じてB組北、B組南と表記する。寺院を村の基点とし、それ以北を北（*nʉa*）、それ以南を南（*tay*）と捉えるのは食施の文脈以外でも村人にみられるが、ここでのA組、B組はあくまでも筆者の分析的枠組みとして提示する。後述の事例で示すように、各組はまとまりをもつ集団とは言い難く、B組が北と南で互いを差異化したり、A組内でも摩擦が起こっている。上記の括りは、食施担当という共通目的のみによる枠組みであり、強固なまとまりは設定し得ない。ただし、組という括りは村人の競合の在り方に関わる点で注目に値する。後述するように、村人は陰口において非難の対象を文脈に応じて変化させるように枠組みを用いることがある。

上記の割当の下、A組は住職への食施を欠かさず行い、B組は不実施の世帯が多い状況であった。確かに、食施は第一義的には個人や世帯の積徳行であり、実施は強制的でなく、基本的に各人の信仰心に任せられている。輪番制施行に中心的役割を担った職能者（*āchān*）や寺委員会も、村人に食施を義務づける権限はもちえていない。

しかし、実際、輪番制の下で僧侶の食事を十全にするには、各世帯の協働が必要となる。もしB組の複数世帯が担当数の多さに甘んじて食施を怠ると、若年僧侶は食事不足になりやすい。現に、輪番は作動しながらも若年僧侶は飢えていた。次節では、飢えの具体的内容を説明し、その直接的原因と考えられる背景について記述する。

(2) 若年僧侶の飢え

筆者は、若年僧侶の飢えに関する会話を僧侶や村人から頻繁に聞いた。飢えとは、「ウッ・カオ（*ʉt khao*：飯米を我慢する）」という現地のラオ語の訳である。「ウッ」は、対象がないために我慢するニュアンスを含み、僧侶に課される正午以降の断食とは区別される。食施に生活基盤を支えられる僧侶にとって、ウッ・カオとは、寄進されるはずの食事がない、または明らかに不十分であることを意味する。さらに、僧侶が食事の有無を、村人からの「パー・カオ（*phā khao*：[食事の]盆）」の数で捉える点をふまえると、ウッ・カオとは、パー・カオがない、もしくは僅少であることと換言できる。

１）飢えの継続

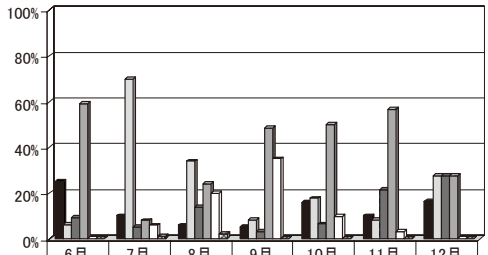
若年僧侶は恒常的に飢えていた。パー・カオが皆無の時も、１～２個の時も少なくなかった。輪番制に従えば最低限毎日12個のパー・カオが若年僧侶に寄進されるところ、実際には、人数分にも満たず、限りなくゼロに近い数しかなかった。

図－１かつ図－２は、177日間（2008年６月15日～12月９日）に亘る若年僧侶の食事状況と飢えの頻度を示している[15]。僧侶にとって食事は、不摂取、自炊、特定世帯での食事、食施、儀礼での食事、住職からの分配に分類される。この中で、不摂取、自炊、特定世帯での食事は、僧侶から飢えと認識される[16]。上記のパー・カオがない状態とは、具体的にはこれらを指す。指示範囲は広いものの、僧侶の認識に基づく飢えが頻繁に起きていたのは注目に値する。

飢えのない月はなく、飢えていない状態が飢えを大幅に上回った（83.3％）のは2008年９月のみであった（図－２）。それは１年で最も盛大な儀礼、プチュム儀礼（*bhchaṃ*）の開催月で、食事の多く

（35％）は儀礼でなされる（図－１）[17]。また、食施は常に全体の半数程度である。さらに、住職の食事は常に十分なのに対し、住職から若年僧侶への分配は限られていた（７月に１％、８月に２％、図－１）。食事摂取が不安定のため若年僧侶は体調を崩しやすく、しばしば発熱や頭痛に見舞われた。しかし、彼らは、飢えの中でも招請があればどの世帯の儀礼にも誦経に赴いていた。

僧侶が村人から食事を受けるのは、単に空腹を満たすためではない。上述のように、食施を通した功徳の獲得や転送に関し、僧侶も村人も食事の意味合いを認識している。こうした観点からも僧侶の飢えは好ましくない。しかも、飢えは、寺院に寄る村人の噂を通して広まり、儀礼時の住職からの叱責等により公になっていたため、村人が知らないはずはなかった。ところが、村人はそれでも、飢えを見過ごしていた[18]。このように飢えが継続する背景には何があったのだろうか。明らかなのは、以下にみるように当番を怠る世帯がいたことである。



	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
■ 不摂取	25.0%	10.0%	6.0%	5.0%	16.1%	10.0%	16.6%
□ 自炊	6.3%	70.0%	34.0%	8.4%	17.7%	8.3%	27.8%
■ 特定世帯	9.4%	5.0%	14.0%	3.3%	6.5%	21.7%	27.8%
■ 食施	59.3%	8.0%	24.0%	48.3%	50.0%	56.7%	27.8%
□ 儀礼	0.0%	6.0%	20.0%	35.0%	9.7%	3.3%	0.0%
⊠ 住職の分配	0.0%	1.0%	2.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%

図－1　若年僧侶の食事状況内訳（2008年６月15日～12月９日）

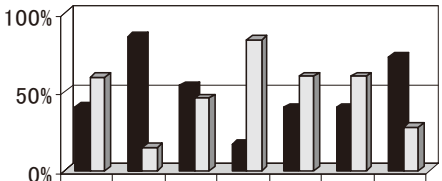
出所：調査にもとづき筆者作成

注１）　対象とした若年僧侶は、表－1の僧侶２に当たる
注２）　自炊：村人からの米の寄進や僧侶の食材購入によって僧侶自ら調理すること
注３）　特定世帯：若年僧侶が寺院の外で特定世帯から食事を受けること
注４）　儀礼：儀礼において食事を受けること

２）食施の怠り

若年僧侶の飢えの直接的原因は、B組が食施当番を怠ったことにある。食施の実施記録簿はなく、特定世帯の実施状況は公にならなかった。しかし、若年僧侶は寄進者の顔ぶれから、村人は弁当箱を掲げる者を道端に見かけたり近所の噂話を通して、他世帯の食施状況を概ね把握していた。しかし、不実施者を直接非難することも、実施を促すこともなかった。

B組世帯の中には、食施しない理由を筆者に語った人々がいる。まず、稲作の農繁期には稲田で寝泊まりし、食施する時間も人手もないという。確かに、前掲図において、田植え期（７月が最盛期）は極端に食施の割合が少ない（８％、図－１）。実際、田植えは短期間に集約労働を要するため、家屋から２～３km離れた稲田小屋に生活拠点を



	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
■ 飢え	40.7%	85.0%	54.0%	16.7%	40.3%	40.0%	72.2%
□ 飢えていない	59.3%	15.0%	46.0%	83.3%	59.7%	60.0%	27.8%

図－2　若年僧侶の飢えの頻度（2008年６月15日～12月９日）

出所：調査にもとづき筆者作成

注１）　飢え：図－1 の「不摂取」「自炊」「特定世帯」の状況を指す
注２）　飢えていない：図－1の「食施」「儀礼」「住職の分配」の状況を指す

移す世帯もある。しかし、それでは農閑期における飢えを説明できない。また、「若年僧侶に食施する世帯は多いから、私達がやらなくても大丈夫だ」という発言もたびたび聞いた。けれども、飢えは噂で広まり、「大丈夫」でないことはB組世帯も知っていたはずである。

しかし、ここで若年僧侶の飢えを協働の失敗例とし、非協力者の存在を指摘するだけでは、現実の細部の理解から遠ざかってしまう。食施を怠る者がいるから僧侶が飢えたという解釈は一面的であり、現実はより複雑である。また、食施の活動に、村全体の協働は必ずしも前提にないようにみえる。B組の言い訳も飢えを正当化しえていない。となると次に問うべきは、B組が食施しない背景である。実は、食施の協働の傍らに、世帯間の競合が陰口として表出していた。それは世帯間の間接的な競合であったが、本来中立的な僧侶をまきこみながら、若年僧侶に飢えをもたらしていた。

３．世帯間の競合

若年僧侶の飢えは、協働の意味合いを帯びた食施の輪番制の下、従来から存在する世帯間の競合が顕在化したものである。その理解には、背後にある世帯間の流動的な陰口への着目が手掛かりとなる。以下では、競合の在り方に留意しながら、A組とB組の世帯の陰口の応酬、他世帯への責任転嫁、A組内の摩擦の事例を記述する。

(1) A組とB組の陰口の応酬

B組の食施の怠りは、先の言い訳以外に、より根本的な事情が関連していた。それは、土地や家屋の所有や住職との関係構築をめぐる、A組世帯への不満に起因する。次の２事例では、各組の世帯間で陰口が起こる。いずれも、相手不在の文脈であり、直接対立に至らない点で共通している。

【事例１】B組からA組への陰口

年配女性P（B組）は、若年僧侶への食施を時々怠っていた。2008年10月30日、筆者が散歩途中に彼女の家屋に立ち寄ると、Pは、H家（A組）に居候する筆者の話に触れた後、P家とH家の関係について、住職への食施にも絡めながら語り始めた。「私達（P家）と彼女達（H家）は親族（*phī nǭng*）だよ。遠い親族さ。近年になってますます（関係が）遠くなった。昔の年配者達はね、積徳行となれば呼び合った。あちらがやるならこちらも一緒にやった。けれど今はなんだって遠いんだ。…なぜって、彼女は非常に持っている（*hang hang mī*）。彼女の物（*khœang*：ここでは土地や果樹等を指す）はたくさん。蹴ったら飛び出してくる（くらいたくさんある）。そうさ、だから私達は貧しいのさ。…あの周辺さ、寺院周辺の家々（*hūan thǣv vat*）さ。彼らは持っている（*mī*）。…（私達は）僧侶（住職のこと、以下同様）とも（関係が）遠い（*kai*）。彼らが僧侶に食事を作ってる。私達ではない。…彼らは僧侶の心を掴んだ（*ao cai*：心を取る）…。」

H家は、Pが言及した「寺院周辺の家々」、すなわちA組に当たる。PはH家を例に、土地や果樹等の財産を多く所有する富者とA組世帯を位置づけ、彼らによる住職への食施独占状況に不満を呈した。「僧侶の心を掴んだ」という発言は、日々の継続的な食施が相手の気を引き、かつ贈与交換のように住職からの対価を期待しうるものである

ことを示唆していた[19]。実際、A組内には、寺院の土地を借りて菜園や商店を作ったり[20]、境内で家畜の放牧をしたり、護符（木綿糸、アルミ箔のお守り等）を優先的に授かる等、住職から恩恵を受ける世帯があった。村では、将来的な対価の期待が明らかな扶助や善行は、相手の心を掴もうとする行為であると否定的に解釈される。PにとってA組の食施は、こうした観点から捉えられている感があった。

B組の中には、Pのように、住職との関係を有利に築くA組世帯に対して不満を抱く世帯があった。若年僧侶への食施は住職の場合と違い、上記のような対価は得られ難いため、自世帯の生業を優先しているようであった21)。彼らが食施しない背後にはこうした事情があった。

一方のA組世帯にも、B組について陰口する者達がいた。次の事例では、2008年のプチュム儀礼期間中に、B組の日々の食施の怠りが批判される。興味深いことに、上記でPがA組世帯を富者としたのに対し、A組はB組世帯を富者と捉えており、間接的に非難の掛け合いがされる。

【事例２】A組からB組への陰口

2008年のプチュム儀礼では、最終日までの14日間、食施の組ごとに僧侶への寄進が割振られた。A組の当番日、講堂に集まった村人達の雑談中、寺委員達が若年僧侶の飢えを懸念する発言をすると、横から女性達が口を出し、B組の食施の怠りを非難した。「彼ら（B組）は貧者だったっけ。…彼らは１世帯に１台はバイクを持っている。今だってきっと畑に出払ってる（換金作物を作っている）んだろうよ。いつだってそうさ」とHが切り出すと、近くの女性達も同意し、「みてごらん、彼らの家屋は大きくて美しい」とI（46歳女性、A組）が言い、畑での換金作物栽培と家屋の美しさを食施の怠りに関連づけた。

ここでHとIは、バイクや家屋の所有状況を参照してB組が経済的困難にないことを指摘し、裕福なのに食施を怠っていると批判した。先例のPの発言と照合すると、互いに相手を裕福と位置づけて批判の根拠にしている。しかし、実際の経済状況を比較すると、HやIの発言は一概に根拠がないとはいえない。

バイクや家屋は、世帯の経済指標として重要な項目である。表－３は筆者の観察と質問調査に基づきP家とH家の経済状況を比較したものである。村人にとって富裕の指標となる現金収入、家畜や土地の所有、家屋の大小や美しさ等、各項目においてP家がH家を上回る[22]。すると、H達の批判は一概に見当外れではなく、双方の言い分の正否は不確かである。むしろ、相手の経済状況の正確な情報よりも、食施の怠りを通して、B組が常に私利私欲を追求していることを非難することにH達の関心があったとも考えられる。

また、次例にみるように、それでも平然と僧侶を招請するB組をただ乗り扱いすることもある。さらに、こうした批判は、直接的に向けられそうになると別の対象に逸らされていく。

【事例３】批判の矛先転換

2008年４月下旬、寺院で沙彌の得度式が開催された。儀礼時には全僧侶が講堂に揃い、村人からの寄進を一斉に受け食事する。早朝、村人が講堂に集い食事を寄進し、僧侶の食事を見届けると、寺院から遠い村人の多くは帰っていった。その後

表−3　P家とH家の経済状況の比較　（2008年2月時点）

世帯名	世帯人数	就学者数	月収	現金獲得手段		土地所有		家畜所有		家屋の様態		耐久消費財の所有	
			（リエル）	公職	その他販売等	（ha）		（頭）				（台）	
P	9	1	400,000	教師	米・換金作物の販売	水田	3.0	水牛	10	大きさ	大	脱穀機・精米機	各1
				警官	養豚・養鶏、脱穀機・精米機の貸出	畑	2.0	牛	10	屋根の素材	トタン	バイク	2
				市役所職員	服の仕立て	菜園	0.5	豚	3	高床高さ	高	自転車	1
								鶏	5	窓の素材	ガラスあり	テレビ	1
								家鴨	8	ドア	新、彫刻あり	ミシン	1
H	3	0	150,000	市役所職員	農作物・果実・加工食品の販売	水田	2.5	水牛	4	大きさ	中	自転車	1
						菜園	1.5			屋根の素材	トタン		
										高床高さ	中		
										窓	木		
										ドア	古		

注）高床高さ：床が高いと、将来的に床下にコンクリート壁の部屋を増設する可能性を示すことになり、立派であると評価される

出所：調査にもとづき筆者作成

まもなくして、住職が、若年僧侶の飢えの状況を語り、日頃の食施に関して村人を激しく叱責した。寺院から近いA組とB組の一部の村人はそこで住職の説教を受けていた。住職は、食施を怠る世帯を具体的に明かさなかった。しかし、彼が立ち去ると、A組の人々が次々と大声でB組を責め始めた。

Iは、「私達が叱られたわけじゃない。彼（住職）は北と南の人達（B組）を叱ったんだ。食施しないのは彼らだ。それに私達は若年僧侶にだって（食事を）作る。当番でなくても食施する。だから彼が私達を責めるはずはない。だって、私達はいつだって食施しているのだから」と、自分達がきちんと食施し、食事に事欠く若年僧侶にも時々寄進していると強調した。

この発言にN（38歳女性、A組）も同意し、「（私達は）僧侶を飢えさせたことなどない。彼ら（B組）は畑に行っているから（食施を）しないんだ。彼らは森（ここでは畑の意）にいるんだからね」と続けた。すると、T（39歳男性、Nの夫）も、「おおい。俺らだって同じさ。俺らだって本当なら稲田（小屋）や畑（小屋）に帰るんだぞ。忙しいんだ」と同調し、農繁期にも欠かさず食施していることを強調した。さらにTは、裕福なB組と飢える若年僧侶を対比して、「昔から彼ら（B組）は貧者ではなかったぞ。見たらわかるさ。バイクあり、ビデオあり。彼らが劣位者（*san phachang*）なわけないだろう。いまや劣位者は寺院に入ってきちゃったさ（若年僧侶の状況を指す）」と揶揄した。そして、「（それなのに）彼らは（食施するものが）『ない（*bǭ mī*）』（からできない）の一点張り。ああ、それだったら（関係を）断ち切ってしまうぞ（*phtác thim pai nā*）」と大声で怒鳴った。

するとC（45歳女性、A組）が突然立ち上がり、

「おおい。あんまり言うもんじゃないよ。（B組が食施）しないならそれまでさ。私だって彼らの（畑や稲田の）小屋をみるたびに、食施しないのかって聞きたいわよ。でも彼らがしないなら、（関係を）断ち切らせてもらいましょう。だって僧侶はずっと飢えている。もうずっとだ。北の人達は恥を知らない。（食施せず）僧侶の招請だけはきっちりやる」と言った。

その時、B組南の一部も会話に加わり、L（60代後半女性）は、半ば息巻いた口調で、「私達は（食施を）していますよ。やってないのは北の人達だよ」と言い、B組南の世帯をB組北から差異化した。それにより、A組からB組全般に対する批判は北の世帯のみに転じられた。

この時の講堂は、複数人が同時に発声し、白熱した雰囲気に包まれていた。そこで、対象を特定しない住職の叱責は、A組の悪口を通してB組へと向けられていった。自分達は食施を欠かさず当番以外でも寄進するのに対し、B組は私利私欲の追求に没頭し食施を怠りながら、世帯の儀礼に平然と僧侶を招請する、とA組は主張する。関係を断ち切るというTやCの発言は、この文脈では、食施の輪番から外して役割を軽減する代わりに、僧侶の招請も控えてもらいたいという意味を含むものと解釈しうる[23]。しかし、僧侶の中立性からすると招請の限定は不可能であると、村人は後ほど筆者に述べていた。また、注意すべきは、この時批判対象となったB組、とりわけ北の村人がいなかった点である。非難は対面状況ではなされず、陰口にとどめられる。また、B組南の人々の言動にも責任転嫁の過程が現れている。彼らは、食施を怠るのは北の世帯であるとし、自分達の実施を強調した。こうして、若年僧侶の飢えの責任は、陰口を通して、村人全般からB組へ、B組全般からB組北へと転化されていった。

本節では、A組とB組の世帯間の競合を、B組からA組への陰口、A組からB組への陰口、批判の矛先転換の順に記述してきた。共通するのは、いずれも陰口や批判が直接対立に向かわない点である。【事例１】、【事例２】では、相手不在の場で陰口され、【事例３】では、対象不確定の住職の叱責を、A組がB組に、B組南がB組北にと逸らすことで、責任を回避していた。また、陰口が村人の行動を強制することもなく、若年僧侶の飢えの問題は宙吊りのまま残される。

そして、次に見るように、実はA組内にも住職をめぐる世帯間の張り合いがあった。その場合も、摩擦は表面化せず、文脈に応じて協調したり相手の様子を窺いながら行動する。

(2) A組内の摩擦

住職から若年僧侶への食事分配が少ないことは先に述べた。それは住職の食事の残りがA組のG家に与えられていたことに起因する。G家と庫裏の間には近道ができており、筆者は、周囲の陰口を知らない頃から、G家の成員が食器や鍋を抱えて住職の庫裏と家屋を往来する姿を頻繁に見かけていた[24]。他世帯から寄進された食材を住職がG家に託して調理してもらい、料理を分けることもあった。また、筆者がG家に遊びに行くと、「住職はいつも私達にくれる」と世帯主の妻Gが語ったこともある。こうした住職とG家の親密な関係はA組内で軋轢を生み、時折陰口として表出した。以下では、G家と住職の関係に対する周辺世帯の反応を見ていく。

G家は寺院の裏手にあり、僧侶の庫裏とも近かった。周辺に居住する他世帯も距離的近接性は同程度であったが、G家は住職と突出した関係を築いていた。G家は住職と親族関係にはなかった。また、世帯主M（60歳男性）は、KS村での出家経験をもつが、当時住職はKS村にいなかった。ある年配男性は、彼らの親密な関係について、「G家は住職の心を掴んだのさ。」と筆者に語ったことがある。住職がKS村に止住を始めた頃（1999年）から、G家は頻繁に食物を寄進し、体調を気遣っていた。だから住職もG家に様々な物を与えているという。彼らの様子を日頃から目にする若年僧侶も、住職がG家に食事を与えるのは、G家が彼の心を掴んだためであると解していた。

村人はG家と住職の関係を知っていたが、G家を直接非難せず、公の場で話題に出すことも控えていた。ところが、何かの折にG家の話になると、張り合いの姿勢が表出することがある。

【事例４】G家への不満の表出

KS村では雨安居期間中、陰暦上弦下弦の各15日になると寺院で儀礼が行われ、村人が食事を僧侶に寄進する。2008年８月１日、寄進を終えて僧侶の食事を見届けた村人が10人強（A組とB組南）残り、講堂で円座になって共食していた。その時、ある者が糯米を手に取りながら、「彼（住職）は私達が寄進しても糯米しか食べない」と住職の食事に言及した。住職が糯米を好んで主食とする傾向は年々強まっていた。しかし、KS村では粳米が主食とされ、糯米は甘味以外滅多に食されないため、糯米の生産量は少ない。そこで筆者は、「では、住職はどこから糯米を得ているのですか」と聞いた。すると、Cが急に立ちあがり、「Gさ。Gからさ」と大声で言った。Cは、G家がほぼ毎日糯米を蒸しては住職に寄進していることを知っており、彼らの関係に絡めてそう言った。筆者以外、そこにいた村人は事情を把握しており、Cの発言を驚きもなく聞き流しつつ顔を見合わせていた。Cは、食施当番以外にも甘味を作っては住職に寄進し、G家と張り合うような行動もとっていた。こうしたCの行動も周囲は知りながら、G家にもC家にも特に言及しなかった。

2008年11月27日、筆者は、Hとその夫Kについて菜園に行った。果実の収穫中、寺院から僧侶の打つ木鐘の音が聴こえてきた[25]。すると、Hが若年僧侶の飢えに言及し、B組の食施の怠りに文句を呈し、さらに話は住職とG家の関係に及んだ。

> 「住職だって困ったもんだよ。もしたくさん（食事を）受けたなら、少しくらい弟達（若年僧侶）に分配するのが普通なのに、彼はしない。彼はG家にあげてしまうからね。…彼自身はほんの少ししか食べないよ、高齢だからね、これっぽっちさ（両手で小円を作って示す）。それなのに、若年僧侶が飢えたとしても、…彼は若年僧侶にはあげないよ。G家にあげてしまう。」

この語りは、住職がG家に食事を与えているために若年僧侶への分配が少ないことを指摘していた。さらにHは、「ほら、Gはよく僧侶（住職）の庫裏に行ってるでしょ。（住職の）食事をもらいに行ってるのさ」と続けた。では、周囲はその状況を知らないのかと筆者が聞くと、横にいたKが、「彼らだって知ってるさ」と答えた。Hも同調し、「彼らだって知ってるけど、（とやかく言うのは）面倒くさいのさ（*khī khān*）」と加え、G家と住職の関係について周囲は沈黙していることを

示した。

しかし同時にHは、「…でもほら、だからみんな（A組）は（弁当箱に詰める量を）あまり多くしない。住職にたくさん持っていけばいくほど、それがG家にまわってしまうからね」とも言った。G家に対する周囲の不満は、確実に存在し、それが陰口や間接的な形で表わされていた。

上記のC、H、Kの言動からは、A組内の世帯間の軋轢がみてとれる。G家は住職の止住当初から彼の気を引く行動をとり、住職から食物の分配を受けていた。Gの発言、村人の噂話、筆者による観察等に照らすと、この食物分配は確かにみえる。こうした状況を周囲は熟知し、快く思っていなかった。しかしこの事例でも、彼らの不満はG家に対する直接的な働きかけに向かわない。G家を直接非難する者はおらず、平素はG家の栽培するキンマをもらったり、散髪を頼んだり、食物交換する等、良好な関係を築いているようであった。

一方G家は、上記のいずれの場面にも居なかったが、住職との関係についての周囲の陰口を感じ取っていた。但し、G家が住職とのやり取りを控えることはなかった。筆者がG家を訪れると、「住職はいつも私達にくれる。でも、彼が（自ら）くれるのだから仕方ない（受け取らないわけにいかない）でしょう」と、何も聞かない筆者に向かって自らの行為を正当化するように語ったこともある。

このように、A組内には、住職をめぐり張り合いがあったが、それは日常的なつきあいの中で直接対立に至らない形で見え隠れするのみであった。さらに、村人の陰口は流動的で、ある文脈ではG家と協調し、他の文脈ではG家を批判することもある。次の事例では、G家の近隣世帯のIに焦点を当て、日常の作業ではG家と協働し、別の文脈では彼らに陰口を呈する様子を提示する。Iは夫とGが遠縁に当たり、Mの妹Nと家屋が隣同士で、親しく行き来していた。彼女は、しばしばG家やN家と米麺（*khao pun*）や甘味を作り、雨季には森へ一斉にキノコ狩りに行く等、日常的に協働していた。こうした文脈では彼女は住職とG家の話に触れず、HやCとの雑談ではG家への悪口に同調する。

【事例５】協調と陰口

2008年６月19日、Iは田植え前の米麺作りをG家やN家と共に行っていた[26]。各世帯が10～15缶分の白米を持ち寄り[27]、作業分担しながら半日以上に亘り米麺を作る。作業は、様々な話題が提供される談笑の中で進められる。米麺作りに誘われた筆者は、作業を手伝いながら会話を聞いていた。米麺が出来上がったら、翌朝３世帯で一斉に僧侶に寄進しようと彼らが確認し合っていた時、若年僧侶の飢えにも言及した。「若年僧侶は飢えてばかり。昨今だって北の人達（B組）は相変わらず食施していない」とNがB組を責めると、Gも、「そうよ。私達（A組）はこうしていつも寄進しているというのに。僧侶を飢えさせたことなんかない」と同意した。続いてIも、B組を意識しながら食施における自分達の協働を誇り、今回の米麺も住職と若年僧侶の双方に寄進すると強調した。

このように、Iは日頃からG家やN家と作業を共にし、その場では住職とG家の件に触れず、Gの発言に同調していた。しかし、G家やその近親が不在の場では、G家への批判に同調していた。

2008年10月27日、IはHと魚類の発酵食品を仕

込みながら会話をしていた。その年の稲作状況に話が及び、もうすぐ糯米が熟す頃だとIが言うと、Hは、住職の食する糯米をめぐってGと言い合いになりそうになったと語り始めた。

「…そのとき住職が（H家の前に）やってきて『おおい、H。糯米をくださいよ』っていうから、私は『おおい、僧侶。私は今年稲作をしていないから糯米はないのです』といったのさ。そしたら（一緒にいた）Gが、『おおい、H。あなたには（糯米が）ないんだから、そんなに頑張って積徳しなくていい。糯米なら（私の家に）あるから、私が（僧侶に）あげたから、あなたはあげる必要ないからね』というのさ。だから私も、『どんなに（糯米が）なかったとしても、私は買ってでも（僧侶に）あげるわよ』と返してやった。僧侶は黙ってたよ。」

Hがこう語るとIは、「彼女（G）が（糯米を住職に）寄進するのはどうってことないわよね。だって彼女は住職と一緒に食べるんだから」と皮肉気味に言った。

上記のIの言動からは、G家に対する同調と陰口といった二重の姿勢がみられた。G家やその近親との間では日常的に作業を手伝いあい、A組という共通の枠組みに照らす文脈では協調しあう一方で、他の文脈では、G家への批判に賛同する。それでこそ、IはG家ともH家とも良好な関係を維持できているともいえる。このように、A組内の摩擦は、日常の調理や生業における協働や陰口の同意に隠されながら、直接対立に発展しない形で存在している。

ここまで、僧侶の飢えの背後にある世帯間の競合の事例をあげてきた。村全体の協働の様相を呈した輪番制の傍らで、陰口という形で競合が起こり、しかもそれは、強固なまとまりをもつ組同士の対立というよりも、批判を逸らし直接対立を回避しながら、流動性を伴った世帯間の競合として生じていた。むしろ、こうした競合の在り方こそが、「協働」を可能にしていたとも考えられる。

4．競合と村落社会の形成

序論で述べたように、ラオ人の村落社会形成に関する先行研究では、連帯や協働を議論の中心に据えた分析が主流であり、日常的な諍いや張り合いに着眼した研究は稀である。既存研究において、競合は、協働のいわば失敗例として過ごされる傾向にあった。ところが、本稿で取り上げた若年僧侶の飢えの事例に目を向けると、競合は必ずしも協働と対極に位置づけられないことに気がつく。前章までの検討において、KS村では協働の背後に陰口という形で競合が存在することが確認された。以下では、それがどのようにラオ村落社会の形成と関連しているかについて、若干の考察を試みる。

3章では、輪番制の背後にある、陰口を通した世帯間の競合の様子を記述してきた。陰口は移ろい易く、対話者、場所、状況によって批判対象も変わる。こうした陰口の流動性は、上記の事例において、都合よく批判対象を逸らし、張り合いの顕在化を回避するように、組が参照されていたことからも窺える。僧侶の食施は輪番制によって村落の協働として作動していたが、村人の関心は、むしろ世帯間の個別的な関係に重点があるようであった。陰口をしながらも、組や他世帯を参照枠として利用しつつ、軋轢を表面化させない。この

点こそが、序論で述べた村落社会の形成と関連する。

【事例１】、【事例２】では、村人が互いの経済状況を妬みながら、食施の実施状況に文句を呈していた。B組世帯は、過去からの世帯間の不和に続き、食施当番もA組世帯の好条件で動いている状況に不満を抱き、若年僧侶への食施よりも生業を優先した。そして、【事例３】のように、責任を直接向けられそうになると自世帯以外にその矛先を転じていた。

一方のA組は、住職への食施独占状況を棚上げし、B組の食施の怠りを批判する限りではまとまっているようであったが、A組内にも世帯間の摩擦があった。【事例４】でみたように、住職から若年僧侶への分配の少ないことに関し、食事の残りが１世帯に流れている状況を、周囲は熟知し不満を抱いていた。その不満は、陰口や住職への食事量の調整によって、間接的に表出していた。しかし、【事例５】のように、A組内の摩擦も直接対立には発展せず、世帯間関係に決定的な変化をもたらすことはない。むしろ、日々の調理や生業における協働や流動的な陰口によって、異なる文脈ではみえなくなる。GとHの双方に協調的なIの行為は、まさに村人の競合の方法を体現したものといえる。

KS村において村人が村全体の共同意識を持つのは、他村や他地域あるいはクメール人等との差異化とともに、儀礼において時折現れる程度である。むしろ、極端なところ、人々の関心は個々の世帯間関係にあるといってもよい。村人は、世帯間関係において、文脈によって相手との共通の枠組みを利用しつつ、張り合いの顕在化を回避する。イアーソンが論じたような、村人の陰口が制裁として働き、村全体の連帯につながるということは、KS村では生じていなかった。KS村では、背後で陰口が重なり合う中で、対面状況では問題なく過ごされ、関係が保たれていく。

諸事例から確認できる重要な点は、第１に、村全体の協働であるはずの輪番制は村人に共同意識を喚起させるものとはいえず、むしろ世帯間関係が問題となっていたこと、第２に、陰口という形を通した世帯間の競合が直接的にならないことである。先行研究では、村落共同体の形成における協働に注目されてきたが、事例ではむしろ、輪番制という協働の傍らに陰口という形で競合が確認された。先行研究の論調に従えば、競合は秩序を乱す、いわば反秩序と捉えられかねない。しかし、KS村において競合は、対立者同士が問題を顕在化させない形で秩序化していっているといっても過言ではない。世帯間の競合は、流動的な陰口や問題の曖昧化を通して、決定的な関係の断絶も強固なまとまりも生み出さない。陰口に示される競合が存在しながらも、日常的な協働が成り立ち、村落社会が形成されるのは、こうした世帯間関係の構築のされ方にある。

５．おわりに

本稿では、僧侶の飢えの背後にある陰口を通した世帯間の競合から、ラオ村落社会の形成過程の一端を提示してきた。共同体内に軋轢があっても平素は問題化せずにつきあうというのは、どこの社会でも起こりうる一般的な話ではある。しかし、ここで論じた意義は、これまでのラオ村落の先行研究で焦点とされてきた協働よりも、競合に光を当て、若年僧侶の飢えという問題を生じさせつつ

も社会が維持、更新されていくプロセスを追ったことにある。

ここで最後に、村落社会の形成過程と若年僧侶の飢えの関係について述べ、結びにかえたい。事例の検討をふまえると、若年僧侶の飢えは、村人の世帯間の張り合いや摩擦の中でこそ継続していたと言える。すなわち、流動的な陰口や文脈に応じた責任転嫁は、世帯間関係を悪化させずに社会を維持する一方で、若年僧侶の飢えが解消されないまま残されていったと考えることができる。

注

1）別の論考においても、村落の概念は複合的、可変的で、常に形成過程にある、とプロセスとしての村落形成という視点を強調する［High 2006b］。

2）本稿は、僧侶の飢えの背後にある村人間の競合に着眼するため、僧侶の性格、能力、振舞い等を中心問題として扱わない。また、協働に関しては食施の協働に特化し、調査地にある他の相互扶助についての記述は、民俗概念「ハック・カン（*hak kan*：親密性）」との関連で別稿に譲りたい。

3）記述にあたり次の限定を断らねばならない。本稿の対象地はカンボジアにあり、事例も当地域の文脈における把握が望ましい。その意味では、ラオスの先行研究の単純な適用は好ましくない。しかし、現在、カンボジアのラオ村落に関する民族誌的資料は皆無に等しい。村人の祖先の大半が南ラオスからの移住者という点も考え合わせると、ラオスの先行研究を起点にするのはあながち的外れではない。

4）調査は、平成18年度文部科学省「大学教育の国際化推進プログラム（長期留学支援）」、平成20年度科学研究費補助金（特別研究員奨励費／課題番号20・274）による研究助成を受けて可能となった。ここに記して深謝致します。

5）但し、クメール語を一部変化させて用いられる独特の表現に関しては、筆者が現地で聞いた音とALA-LC法の表記を照合させて表記する（例：クオサー［*khūosā*：家族］）。なお、「ラオ」は「ラーオ」とするのが適当だが、先行研究での表記慣習に倣い、ここでは「ラオ」と記述する。

6）世帯のエスニシティ構成別に見ると、世帯主夫妻ともにラオ人の世帯と、夫がクメール人で妻がラオ人の世帯は、日常的にラオ語を使用し、その数は233世帯（87%）に及ぶ［山崎 2010：136］。

7）例えば、後述のプチュム儀礼期間中にはクメール人の慣習に照らし7つの寺院を詣でるのが良いと言われるものの、村人は自村の寺院にしか詣でず、複数寺院をまわる他地域の人々を非難することもある。

8）7人中、比丘が4人、沙彌が3人であった。比丘が227戒を授かり、沙彌は10戒しか授からない点で両者は異なる。また、7人とは、筆者の滞在期間中に2人が還俗し1人が出家した状況を含む。

9）女性修行者はナン・シー（*nang sī*）あるいはドーン・チー（*ṭūn jy̆*）と呼ばれ、剃髪し白衣をまとい寺院に住むが、カンボジアの仏教では尼僧とは位置づけられない。州都のP寺やターラーボリヴァット郡のT寺には女性修行者が多く、僧侶の食事は彼女らを中心に寺院内で大鍋で調理されている。

10）コンポントム州のクメール村落では、一部の村人が近隣村の村人と曜日ごとに輪番で食施する様子がみられる。そこでは、当番が寺院に集い大鍋で共同調理し、僧侶に一斉に寄進する［小林 2007：180-182］。

11）近年は雨安居中の3ヶ月間、若年僧侶が毎朝1回托鉢を行っている。

12）ここでいう祖先は、父母、祖父母、曽祖父母の3世代位までを指す。村人は白紙に彼らの名前を記して供物とともに僧侶に寄進する。

13）「僧侶がいなければどうやって儀礼をしたらいいんだろう」という決まり文句を、筆者は村人から何度も聞いた。

14）当初、個々の若年僧侶にも夫々担当の組があった（表-2）が、実際には村人は若年僧侶への一括的な食施と捉えていた。

15）データは、筆者の参与観察と寺院への定期的訪問を通した質問調査に基づく。質問は、料理の種類、量、食事場所等、多項目に亘る。図-1の項目分類は、対話の中で僧侶が行っていたものである。

16）特定世帯での食事は、若年僧侶が寺院の近隣世帯で食事を受けることを指す。筆者もその光景を度々見かけたが、それらは飢えを解消するに至っていなかった。

17）プチュム儀礼は、祖先や餓鬼を供養する儀礼で、陰暦10月下弦1日～15日の15日間に亘って行われる。この間、KS村では、連日朝昼2回、村人が御馳走を準備し寺院に集い、僧侶に寄進する。

18）時折、A組世帯が若年僧侶に食事を寄進したり、自家に招き食事を捧げていたが、それも一時的であった。

19）筆者は村人と僧侶の間でなされる物の交換を頻繁に目にした。村人が僧侶に果実や飲料を捧げ、僧侶は村人に護符や儀礼時の寄進物の分配をする。ある年配男性が、自世帯のライムを掴ぎながら、「〇〇僧侶は私にライムが欲しいと言っていた。彼にだったらいくらだってあげるさ。彼に対してはけちにならないよ。だって、彼はいつもくれるから。」と筆者に言った。この発言は、ライムを僧侶に捧げる行為が、寄進に加え、贈り物のやり取りの意味合いも含むことを示すものと理解できる。

20）寺院の土地は、周囲を囲む垣根内部のみならず、そこから張り出した部分も含まれる。上記の菜園や商店はその土地を利用していた。また、住職の庫裏付近の花壇を村人が借りて菜園にすることもあった。

21）先述のように（注２）、僧侶の能力や積徳の多寡に関しては本稿では中心問題として扱わないため、深く言及しない。

22）もちろん、世帯人数の差を考慮すると、現金収入の多少の単純比較から判断することはできないが、他項目を加え相対的にみても、P家が貧しいとは想定しにくい。

23）実際、2010年12月の再訪時に知らされたことだが、2010年に輪番が編制され、北の家は、組に含まれつつも、日々の食施ではなく、米と現金の一括寄進へと役割が変わっていた。

24）それがG家と住職の庫裏を結ぶ近道であるのは明白であった。というのも、後に住職が庫裏を移動した時、近道も新たに作り直されたからである。それは、他世帯の屋敷地を分け入り、庫裏に向かって伸びていた。

25）僧侶は朝昼の食事時間前に寺院内の木鐘を打つ。その音は、村人の食施の合図であると同時に、生活サイクルにおける作業の区切りの目安にもなっている。

26）KS村では、田植え前と終了後に米麺を作る習慣がある。米麺は自家消費や他世帯への分配のみならず僧侶にも寄進され、それを通して祖先に田植えの報告をするとされている。

27）米を測る単位は練乳の空缶が用いられる。

引用文献

CEPA 2006 *dhndhāntrī ni'n jīvabhāb raś nau rapaś prajājan*. Studio Terra Co. Ltd. and CEPA.

Evans, Grant 1995 *Lao Peasants under Socialism and Post-Socialism*. Chiang Mai. Silkworm Books.

High, Holly 2006a Cooperation as Gift versus Cooperation as Corvee: Why Lao rice farmers cooperate for rice production in a way they don't for state projects. Yale SEAS 2005 conference (Regenerations: New Leaders, New Visions in Southeast Asia). working paper. Yale University, Council of Southeast Asian Studies.

———— 2006b "Join Together, Work Together, for the Common Good-Solidarity" : Village Formation Processes in the Rural South of Laos. Sojourn: Journal of Social Issues in Southeast Asia. 21 (1) 22–45.

Ireson, W. Randall 1996 Invisible Walls: Village Identity and the Maintenance of Cooperation in Laos. *Journal of Southeast Asian Studies*. 27(2) : 219–244.

小林知 2007『ポル・ポト時代以後のカンボジアにおける地域社会の復興―トンレサープ湖東岸地域の事例』（博士学位論文）京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科提出。

Montii phaenkaa khaet stung traeng 2008 *Siawphow tinnei phuum khum chnam 2007*, Montii phaenkaa khaet stung traeng.

中田友子 2004『南ラオス村落社会の民族誌―民族混住状況下の『連帯』と闘争』明石書店。

Taillard, Christian 1977 Le Village Lao de la Region de Vientiane: Un pouvoir local face au pouvoir etatique. *L'Homme*. 17(2 / 3): 71–100.

山崎寿美子 2010「カンボジア北東部のラオ村落における人物呼称―ラオ語とクメール語の融合的使用と言語の創造」『南方文化』第37輯：131–158。